

○本を読む●

「あなたはふしぎなしかたで、
わたしに関与した」

(et egisti mecum miris modis)

-アウグスティヌス、『告白』、第五卷第七章一三節-

松崎一平

『告白』第一巻から第九巻にかけての、いわゆる自伝的部分は、『告白』の著者であるヒッポ・レギウスのカトリック教会の司教アウグスティヌスが、カトリック・キリスト教の神に回心するまでの、いわば、キリスト教の圏外における生の軌跡を回想しながら、そこにおのれにたいする神の配慮（恵み）を見いだそうとする試みである。その試みをよく見てとることができる箇所のひとつが、第五巻のなかば、カルタゴの若き修辞学者がローマに行く決断をするところである。その箇所を読みながら、『告白』の著者が「神の配慮」をどのように考えるのか、紙幅のゆるすかぎり明らかにしたい。

*

『告白』第五巻のなかばでアウグスティヌスは、カルタゴを訪れたマニ教の司教ファウストゥスとの交流について回想する。

若きアウグスティヌスは、『ホルテンシウス』体験をきっかけに激しく燃えあがった「知恵への愛」、すなわち哲学的探求への意欲をみたしうる場を期待して、おそらく一九歳のころ、マニ教に参加した（三・六・一〇）。以来、教祖マニが受けとった啓示にもとづくといわれる教典（神話的宇宙生成論を核にもつ）を熱心に学びながら、いっぽうでキケロなどの哲学の書やギリシア哲学に由来する天文学の書物をも学び、しだいに後者の理論の合理性を理解するようになり、それとともに、マニ教が真理であると主張していたその宇宙論に疑いをもつようになる（五・三・四-四・七）。その疑いをマニ教の同志にぶつけてもかれらは答えることができず、口をそろえて、ファウストゥスが来れば解消してくれるだろう、という。長年待ち焦がれたファウストゥスとの出会いは、しかし失望に終わる（五・六・一〇-一一）。すでに八年あまりカルタゴで修辞学者としてキャリアを積みながら、マニ教以外の哲学上の著作をも広く学んでいた二九歳のアウグスティヌスは、マニ教を代表するこの学者の学識の貧弱なことをただちに了解した。アウグスティヌスの回想を聞こう。

……ほかのひとたちがかれと話しあってもさしつかえないときに、わたしの親しい連中といっしょにかれの耳をとらえて、わたしを動かしていたことがらを差したとき、わたしはすぐにわかった、かれが文法学、しかもありふれた程度のそれ以外の自由学芸を欠く人間であることが。そしてかれは、トゥッリウス〔キケロ〕のいくつかの弁論と

セネカのわずかな書と詩人たちのわずかとラテン語で巧みに書かれた自身の宗派のいくつかの書巻を読んでおり、また毎日の説教の実践があったので、雄弁—それは、才能の管理と生来の感じのよさとによって、いっそう好ましくいっそう説得的になっていた—が備わっていた。(五・六・一一)

アウグスティヌスは、こうしてファウストゥスの学識の乏しさに失望し、長年の疑問についてかれから答えを得る望みを失う。

じつのところ、かれが抜きんでているとわたしが思っていたあれらの学芸について、かれが見識を欠くことがわたしにじゅうぶんに明らかになってから、わたしは、わたしを動かしていたことがらをかれがわたしにたいし解明することができる望みを失いはじめた。(五・七・一二)

若きアウグスティヌスが哲学的探求に熱心に取り組み、そのための場としてマニ教に参加したことを考えると、マニ教徒たちの最後の砦というべきファウストゥスによって疑問が解決される希望が完全になくなったのなら、それ以上ファウストゥスと交際する必要もマニ教としてとどまる必要もない。ところがアウグスティヌスは、ファウストゥスのある意味で評価し、交際を続けた。順序は前後するが、かれの回想を聞こう。

……かれは自分がそれらのことを知らないことを知っていたし、それを告白することを恥じもしなかった。かれは、わたしが経験した多くのおしゃべりども—かれらは、それらのことをわたしに教えようと努めながらも語らなかつた—に類する者たちと同じ類ではなかった。たしかにこのひとは、ころをもっていた—あなたに正しく向けられてはいなかったにしても、自分自身にはなほだしく不注意というのでもないころを—。かれはみずからの無知をいつも知らないわけではなく、軽率に議論をすることによって、そこからのいかなる出口も容易な帰路もかれにないようなことらにおのれをおしこめることを望むこともなかった。これによってもまた、かれはますますわたしに気に入った。じっさい、告白する精神のつましはいっそう美しい、わたしが知りたいと欲していたあれらのことがらよりも。そして、いっそう困難でいっそう煩瑣なすべての諸問題においても、かれがそのようであることを、わたしは見いだした。(五・七・一二)

ここには、長年つきあってきたマニ教徒の饒舌と無知にたいして高じていた不満と、かれらの学問的寵児というべきファウストゥスが、哲学を学ぶカルタゴの若き修辞学教師にたいして示した、ほかのマニ教徒たちにはまったく見いだせなかつたその人柄の魅力とが回想されている。その魅力は、端的にいうと、知ったかぶりをして、かえってにっちもさっちもいなくなる愚を避ける、みずからの無知をわきまえた率直さだった。そのことは、アウグス

ティヌスが、カルタゴのマニ教徒たちとの付き合いのどんな点にうんざりしていたのかを教えてくださいるとともに、カルタゴの若き哲学の徒が、ソクラテスにあこがれをいただいていたらしいことを垣間見せてもいる（松崎、二〇一二年）。アウグスティヌスは、期待していたファウストゥスの知的レベルを知り、かれをほめそやしていたマニ教の他の学者たちにたいする期待は完全になくなったが、うえに述べたとおり、その学識に失望したファウストゥスと親密に付き合い始める。かれの回想を見よう。

こうしてマニの書に集中していたわたしの熱意は粉碎され、わたしを動かしていた多くのことがらにおいて、高名なファウストゥスがそんな風であることがあらわれたときに、かれらのほかの学者たちについていっそう絶望して、わたしは、その時期すでに修辞学者としてわたしがカルタゴの青年たちに教えていたその学問において燃えあがっていたファウストゥスの熱意におうじて、かれと時を過ごしはじめ、かれが聞いたことがあって読みたいと望んでいたものや、わたし自身がそのような才能に適していると判断したものを、かれと読みはじめた。（五・七・一三）

アウグスティヌスは修辞学者として、ファウストゥスの希望と学力にふさわしい修辞学の教材を選択して、ともに読みはじめたというのである。カルタゴの若き修辞学者は、みずからの無知を認めるファウストゥスの好ましい人柄を、むしろよき学習者として評価した。おのれの無知をともに率直に認め合うところから始まる協同の探求に、ソクラテス的な交流の魅力を感じ取ったのかもしれない。ただし、アウグスティヌスの役割はソクラテス寄りであり、ファウストゥスは生徒の側になる。周知のように、つづく第八章一四節でアウグスティヌスは、カルタゴの学生が乱暴狼藉のかぎりを尽くすので、学生たちの学習態度がよいという評判のローマにいて教える決意をしたことを回想していることから推せば、ファウストゥスとの協同において、理想に近いしかたで教えることによるこびを感じたのかもしれない。『ホルテンシウス』に誘われた若き哲学の徒が、真の知恵を心底から希求していたということだろう。

さらにアウグスティヌスは、マニ教との関係についても継続する。かれによると、その理由はいかのとおりである。

……そのセクト〔マニ教〕において達成することをわたしが企てていた、わたしのすべての意欲は、そのひと〔ファウストゥス〕が知られると、まったく生滅したが、かれらから完全に離されることにはならず、いわば、もっとよいなにかを見いだしていないので、より優先されるべきなにかがたまたま輝きだすことがないかぎり、どんなしかたによってであれ、すでにとびこんでいるもの〔マニ教〕に、当面満足しておこうとわたしは決心した。（五・七・一三）

カルタゴの修辞学教師時代の終わりころ、おそらく三八三年、二九歳のアウグスティヌス

は、哲学探究の場としてマニ教に完全に絶望しながらもそれにとどまり、絶望のきっかけとなったファウストゥスとの付き合いを、どちらかという教える立場に立って楽しんだ。うへの引用文で語られているように、そのころアウグスティヌスは、哲学の徒として、マニ教から離れようとしつつ、どこに向かうべきかわからないという、いわば宙ぶらりんの状態にあった。それから二〇年後、『告白』を書いているヒッポ・レギウスのカトリック教会の司教は、そのようなありかたを、以下のように説明している。

じっさい、あなたの手は、わたしの神よ、あなたの摂理の隠されたところで、わたしのたましいを見捨ててはいなかったし、わたしの母のころの血から、涙をとおして昼に夜にあなたにいけにえが献げられていたし、あなたはふしぎなしかたで、わたしに関与した。あなたこそがそのことをおこなったのだ、わたしの神よ。じつのところ、「主によって、人間の歩みは整えられ、その道をかれは望むだろう」（詩編三六・二三）。だが、救いのために、いったいなんの配慮があるというのか、—あなたの造ったものらを造り直すあなたの手がなければ。（同、下線は松崎による）

引用文の、とくに下線部から容易に読み取れるように、アウグスティヌスは、三八三年ころ、カルタゴをあとにしてローマに移る時期の、自分の中途半端なありかたを神の配慮によるものとみなし、「ふしぎなしかたで」と驚いている。それはどういうことか。

周知のように、アウグスティヌスが母を欺いて、夜半にこっそりとひとりで船出して（五・八・一四）向かったローマでの宿所のあるじは、かれと同じマニ教徒の聴聞者だった（五・一〇・一八）。期待したローマの学生たちは、なるほど学習態度は期待どおりだったが、教師に謝礼を支払うころになると、しめしあわせて突然、別の教師のもとに移った（五・一二・二二）。こうしてローマで教えることに執着する理由もなくなったところで、これもマニ教徒仲間の協力を得て、帝都ミラノの修辞学教師のポストを手に入れる（五・一三・二三）。ミラノの司教アンブロシウスと対立していた、古来の宗教の信奉者であったローマ市の長官シュンマクスが、ミラノのキリスト教的空気にくさびを打ち込むために、マニ教徒の若い修辞学教師に白羽の矢を立てたと推測されている。三八四年にかれはミラノに着任し、二年ほどのちに、アンブロシウスの説教を聞いたことなどをきっかけに、カトリック・キリスト教に関心をもつようになり、紆余曲折を経てカトリック教会の神を信じるようになる、いわゆる回心を体験する（八・一二・二八-三〇）。

このように、ファウストゥスとの出会い以後の展開をたどると明らかになるように、マニ教にとどまったことによって保たれ、それにともない新たに生まれた人間関係が、かれをミラノに呼び寄せ、回心をかいしてカトリック教会にいたらしめた。停滞的で非生産的な宙ぶらりんの状態が、かえって豊穡な実りを呼びよせたのだ。アウグスティヌス自身は、いわば優柔不断だったにすぎないが、それが豊かな実りに結びついたのは、神の配慮があったからだ。『告白』を書いているヒッポ・レギウスの司教は、そう考えている。

宙ぶらりんの状態のもとで、カルタゴをあとにしてローマに赴く決断をしたことを、アウ

グスティヌスは次のように回想している。

ところが、あなた〔神〕……は、地上の場所をわたしのたましいの救いのために移すよう、カルタゴではわたしがそこから引き離されるために突き棒を動かし、ローマではわたしが引きつけられるために、死せる世を愛するひとびと〔マニ教徒〕……をとおして、もろもろの魅惑をわたしに差し出して、わたしの歩みを矯正するために、かれらとわたしの転倒をあなたはひそかに用いたのだった。じつのところ、わたしの閑暇をかき乱していた連中は、だらしのない狂気によって盲目だったし、別の地に招いていた連中は地を味わっていたし、たほうわたしはといえば、ここでは真の悲惨をのろい、かしこでは偽りの幸福を欲していた。(五・八・一四)

生徒たちの愚かしい無法な乱暴と、カトリック・キリスト教の神に背を向けるマニ教徒仲間の勧めが、地位と名誉を欲するカルタゴの若き修辞学教師にローマ行きを決断させた。てんではたらく三つのベクトルは、合力してアウグスティヌスをミラノへ、カトリック教会の神への回心に導く。『告白』の著者にとって、これらの三つのベクトルはいずれも、意志にもとづくというよりは、「かれらとわたしの転倒」といわれているように、盲目的な欲望の圧力とみなすべきものである。それらは、しだいによじりあわされるかのように合力して、いわば予定調和的にミラノの回心に収斂した。アウグスティヌスは、そのことに気づき、それを神の計らい、神の配慮と考え、「あなたはふしぎなしかたで、わたしに関与した」とコメントする。アウグスティヌスの恩恵論の基盤が、まさにここにある。ところで、神の恩恵の海原を漂う若者において、浮力というべきものがあつたとすれば、真の知恵を希求するその熱意だろう。

(二〇一三年五月三一日)

【参考文献】

松崎一平「アウグスティヌスとプラトニズム」(第五九回大会シンポジウム「中世におけるプラトニズム—教父時代から12世紀まで—」提題)『中世思想研究』第五四号、中世哲学会編、二〇一二年、一〇七—一九頁。

なお、テキストはCorpus christianorum所収のもの。翻訳はすべて松崎による。